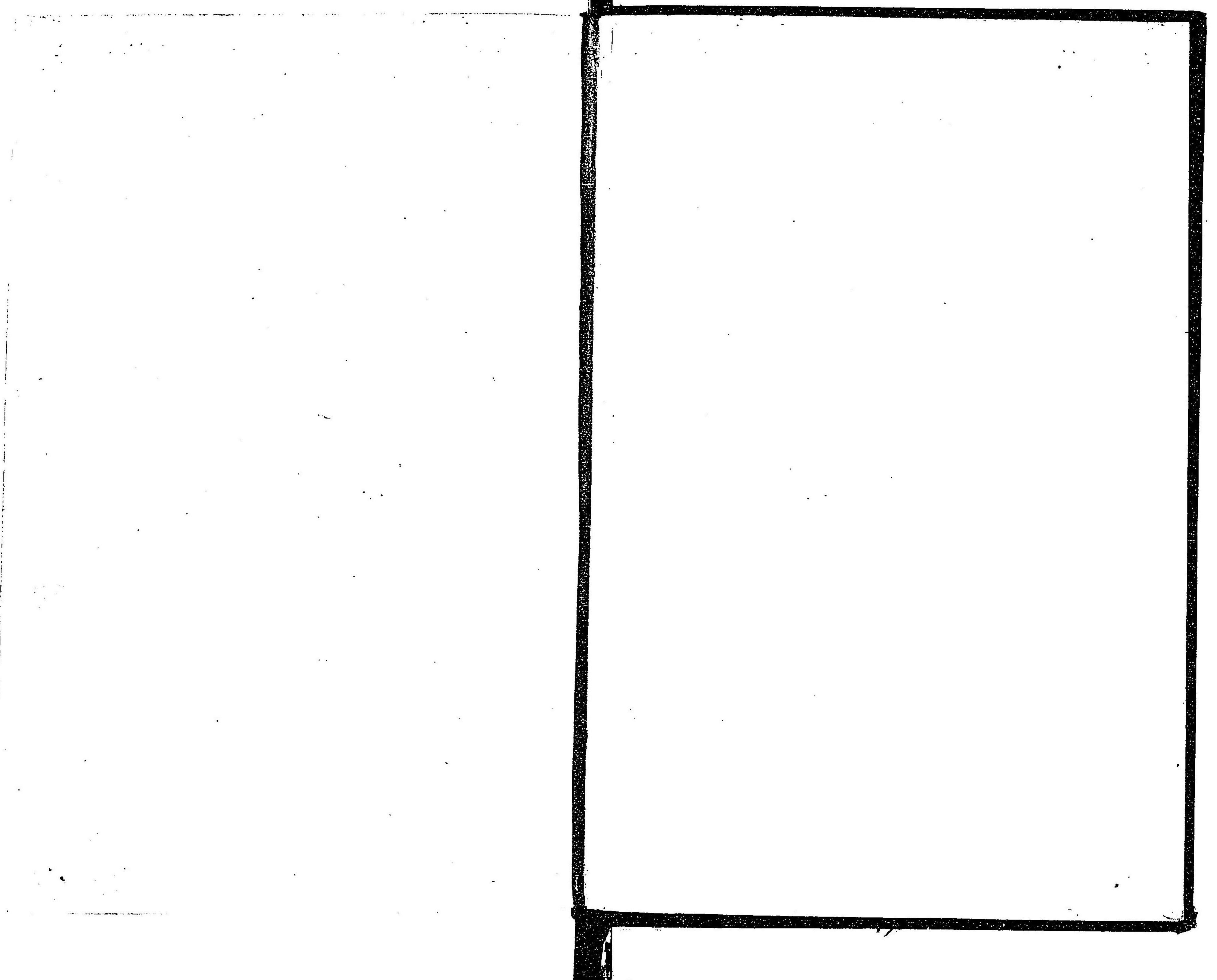


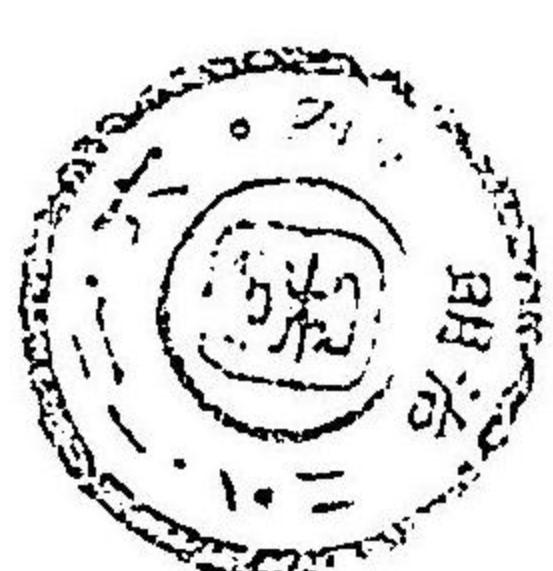
矢津昌永著
新日本地誌



矢津昌永著



新日本地誌



東京

丸善株式會社

詔 勅

朕惟ふに國運の進張は治平に由りて求むへく治平
を保持へて堯く終始あらしむるは朕か祖宗に承く
るの天職にして亦即位以来の志業たり不幸容歲清
國と釁端を啓き朕は止むを得す之と干戈を交へ十
閏月の久しきに結ひて解くる能はず而して在廷の臣
僚は陸海兩軍及議會兩院と共に咸能く朕か旨を體
して朕か事を獎め内に在ては參畫經營し費用を給

し需供を豊にし防備に力め外に在ては櫛風沐雨祁
寒隆暑に暴露し百難を冒し萬死を顧みず旭旗の指
す所風靡せざるなし出征の師は仁愛節制の聲譽を
播し外交の政は捷敏快暢の能事を盡し以て能く帝
國の威武と光榮とを中外に宣揚したり是れ朕か祖
宗の威靈に頼ると雖も百僚臣庶の忠實勇武精誠天
日と貫くよ非さるよりは安と能く此よ至らんや朕
は深く汝有衆の忠勇精誠よ倚信し汝有衆の協翼ふ

賴り治平の回復を圖り國運進張の志業を成さむと
するよ切なり

今や朕清國と和を講し既に休戦を約し干戈を戢む
る將に近に在らむとす清國渝盟を悔ゆるの誠已に
明にして帝國全權辦理大臣の按定せる條件克く朕
か旨に副ふ治平光榮併て之を獲る亦文武臣僚の互
に相待て全功を收めたるに外ならず祖宗大業の恢
弘今や方に其の基を鞏め朕が祖宗に對するの天職

は斯ニ其重を加ふ朕は更ニ朕の志を汝有衆に告げ
以て将来の嚮ふ所を明ふせざるへからず
朕固り今回之戰捷ニ因リ帝國の光輝を闡發したる
を喜ぶと共に大日本帝國の前程は朕か即位以来の
志業と均く猶ほ甚た悠遠なるを知る朕は汝有衆と
共ニ努テ驕泰を戒め謙抑を旨とし益々文教を振て文に泥むおど
て武を躉すおとなく益々文教を振て文に泥むおど
なく上下一致各々其事を勉め其業を勵み以て永遠

富強の基礎を成さむおとを望む戰後軍防の計畫財
政の整理は朕有司に信任して専ら贊籌の責ニ當ら
しむヘーと雖も積累蘊蓄以て國本を培ふは主とし
て億兆忠良の臣庶に頼らざるへからず若夫勝に狃
れて自ら驕り漫よ他を侮り信を友邦よ失ふか如き
は朕か斷して取らざる所なり乃ち清國よ至ては講
和條約批准交換の後は其の友交を復し以て善隣の
誼愈々敦厚なるを期すへし汝有衆其れ善く朕か意

を體せよ

御名御璽

明治二十八年四月二十一日

媾和條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ媾和條約ヲ訂結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ヲ大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章二品頂戴前出席大使李經芳ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任状ヲ示シ其良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條

清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條

清國ハ左記ノ土地ノ主權竝ニ該地方ニ在ル城壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス

一 左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城海城營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル所ハ該河ノ中央ヲ經界トスルコト、知ルヘシ

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼

二 臺灣全島及其附屬諸島嶼

三 澎湖列島即英國グリーンウイチ東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼

第三條

前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實地ニ就テ確定スル所アルヘキモノトス而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任スヘシ

該境界劃定委員ハ成ルヘク速ニ其任務ニ從事シ其任命後一箇年以内ニ之ヲ終了スヘシ

但シ該境界劃定委員ニ於テ更定スル所アルニ當リテ其更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ維持スペシ

第四條

清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀貳億兩ヲ日本國ニ支拂フヘキコトヲ
約ス右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ毎回五千萬兩ヲ支拂フ
ベシ而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六ヶ月以内ニ次回ノ拂込ハ
本約批准交換後十二ヶ月以内ニ於テスヘシ殘リノ金額ハ六ヶ月賦ニ
分チ其第一次ハ本約批准交換後二ヶ月以内ニ其ノ第二次ハ本約批准
交換後三ヶ月以内ニ其第三次ハ本約批准交換後四ヶ月以内ニ其ノ第
四次ハ本約批准交換後五ヶ月以内ニ其ノ第五次ハ本約批准交換後六
ヶ月以内ニ其ノ第六次ハ本約批准交換後七ヶ月以内ニ支拂フヘシ又
初回拂込ノ期日ヨリ以後未タ拂込ヲ了ラサル額ニ對シテハ毎年百分
ノ五ノ利子ヲ支拂フヘキモノトス

但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ全額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時
ニ支拂フコトヲ得ヘシ如シ本約批准交換後三ヶ月以内ニ該賠償金ノ

總額ヲ皆濟スルトキハ總テ利子ヲ免除スヘシ若夫迄ニ二ヶ月半若ハ
更ニ短期ノ利子ヲ拂込ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スヘシ

第五條

日本國へ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ
外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其所有不動產ヲ賣却シテ退去スル
コトヲ得ヘシ其爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二ヶ月間猶豫スヘシ但シ
右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都合
ニ因リ日本臣民ト視爲スコトアルヘシ

日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各一名以上ノ委員ヲ臺灣省へ
派遣シ該省ノ受渡ヲ爲スヘシ而シテ本約批准交換後二ヶ月以内ニ右
受渡ヲ完了スヘシ

第六條

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戦ノ爲メ消滅シタレハ清國ハ本約批准
交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ日本全權委員ト通商航海條約及陸路
交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス而シテ現ニ清國ト歐
洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基
礎ト爲スヘシ又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清
國ハ日本國政府官吏商業航海陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ總
テ最惠國待遇ヲ與フヘシ

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六箇
月ノ後有効ノモノトス

第一 清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本
國臣民ノ商業住居工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開ク
ヘシ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハル、所ト同一ノ條件ニ

於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スヘキモノトス

一 湖北省荊州府沙市

二 四川省重慶府

三 江蘇省蘇州府

四 浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス

第二 旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄
擴張スヘシ

一 楊子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル

二 上海ヨリ吳淞江及運河ニ入り蘇州杭州ニ至ル

日清兩國ニ於テ新章程ヲ妥定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用

シ得ヘキ限ハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スヘシ

第三 日本國臣民カ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ル、ノ權利ヲ有スヘシ

第四 日本國臣民ハ清國各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ヘク又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ヘシ

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内國運送稅内地稅賦課金取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民カ清國ヘ輸入シタル商品ト

同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典免除ヲ享有スヘキモノトス此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スヘキモノトス

第七條

現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後三箇月内ニ於テスヘシ但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フヘキモノトス

第八條

清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衛ヲ占領スルコトヲ承諾ス而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清國海關稅ヲ以テ抵當ト爲スコトヲ承諾スルニ於テハ日

本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ撤回スヘシ若シ又之ニ關シ充分適當ナル取極立タサル場合ニハ該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタル時ニ非サレハ撤回セサルヘシ尤通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非サレハ軍隊ノ撤回ヲ行ハサルモノト承知スヘシ

第九條

本約批准交換ノ上ハ直ニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ還附スヘシ而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セサルヘキコトヲ約ス

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪者ト認メラレタルモノハ清國ニ於テ直ニ解放スヘキコトヲ約シ清國ハ又交戦中日本國軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サヌ又之ヲ爲サシメサルコトヲ約ス

第十條

本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スヘシ

第十一條

本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルヘシ而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日即光緒二十一年四月十四日ニ交換セラルヘシ

別約

第一條 本日調印シタル媾和條約第八條ノ規定ニヨリテ一時威海衛ヲ占領スヘキ日本國軍隊ハ一旅團ヲ超過セサルヘシ而シテ該條約批准交換ノ日ヨリ清國ハ毎年右一時占領ニ關スル費用ノ四分ノ一庫平銀五十萬兩ヲ支拂フヘシ

第二條 威海衛ニ於ケル一時占領地ハ劉公島及威海衛灣ノ全沿岸ヨ

リ日本里數五里ノ地ヲ以テ其ノ區域ト爲スヘシ
右一時占領地ノ經界線ヲ距ルコト日本里數五里ノ地内ニ在リテハ
何レノ所タリトモ清國軍隊ノ之ニ近ツキ若ハ之ヲ占領スルコトヲ
許サマールヘシ

第三條 一時占領地ノ行政事務ハ仮ホ清國官吏ノ管理ニ歸スルモノ
トス但シ清國官吏ハ常ニ日本國占領軍司令官カ其ノ軍隊ノ健康安
全紀律ニ關シ又ハ之カ維持配置上ニ付必要ト認メ發スル所ノ命令
ニ服從スヘキ義務アルモノトス
一時占領地内ニ於テ犯シタル一時ノ軍事上ノ罪科ハ日本國軍務官
ノ裁判管轄ニ屬スルモノトス
此ノ別約ハ本日調印シタル媾和條約中ニ悉ク記入シタルト同一ノ效
力ヲ有スルモノトス

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於
テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣内閣總理大臣
從二位勳一等伯爵伊藤博文印
大日本帝國全權辦理大臣外務大臣
從二位勳一等子爵陸奥宗光印
大清帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣
直隸總督一等肅毅伯李鴻章印
大清帝國欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣李經芳印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本皇帝(御名)此書ヲ見ル
有衆ニ宣示ス

朕親シク明治二十八年四月十七日下ノ關ニ於テ帝國全權辦理大臣大
清帝國全權大臣ノ記名調印シタル媾和條約及別約ノ各條目ヲ閱觀點
檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約及別約ヲ

嘉納批准ス

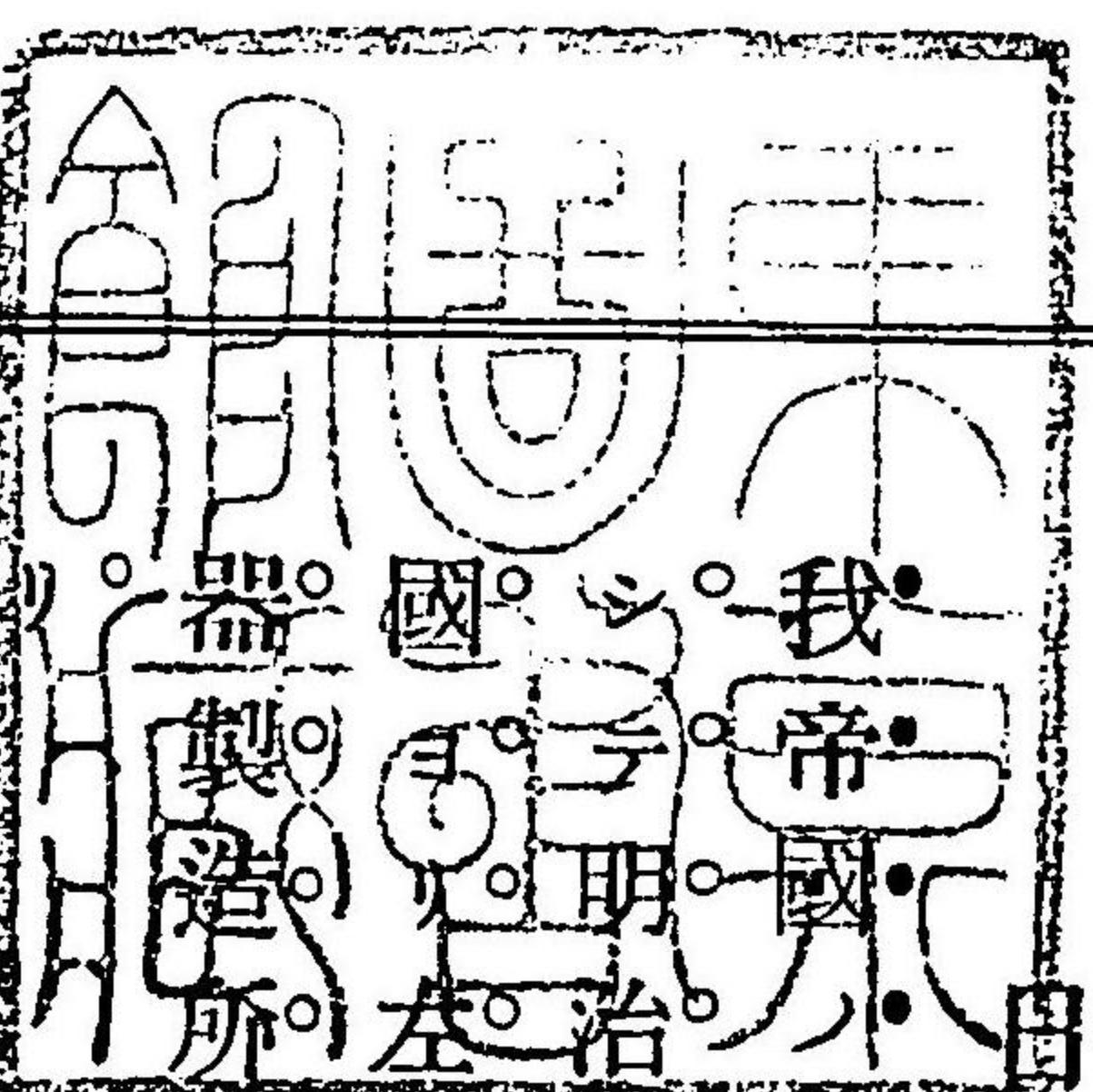
神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年四月二十日廣嶋行
在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名國璽

新日本地誌

矢津昌永著

日本新領地



新領地ノ記二新領地ハ日清戰爭ニ依リ。其ノ關條戰勝ノルニノモ城據結果ノ兵清ト。

本新領地ノ土地位ノ主權并ニ該地方割與シニ條約勝ルルニノモ城據結果ノ兵清ト。

及官有物ヲ永遠我國ニ該地ノ主權并ニ該地方割與シニ條約勝ルルニノモ城據結果ノ兵清ト。

器製造所ノ主權并ニ該地ノ主權并ニ該地方割與シニ條約勝ルルニノモ城據結果ノ兵清ト。

左治新領地ハ日清戰爭ニ依リ。其ノ關條戰勝ノルニノモ城據結果ノ兵清ト。

明治十八年四月十七日下ノリ。ノモ城據結果ノ兵清ト。

我國ニ割與シニ條約勝ルルニノモ城據結果ノ兵清ト。

新領地ハ左ノ如シ

(二) 澎湖列島
(三) 遼東半島及其附屬島嶼

一) 臺灣島

臺灣ハ下ノ關條約ニヨリ明治二十八年六月三日樺山總督ハ清國使節李經芳ヨリ全島ノ引渡ヲ受ケ茲ニ全ク大日本帝國版圖ニ歸セリ本島ハ一名ヲふあるもさ(Hormosa)ト稱ス是レ葡萄牙人ノ名ツケシモノニシテ同國人ノ始メテ此島ニ到リシ時、綠林篤蒼トシテ白波ノ裏ニ崛起スルヲ望ミ(La Formosa)(美麗ノ意)ト稱セシニ由來セリ我國ヨリハ曾テ高砂島ト呼ヒ或ハ本國フ蜻蜓洲ト稱セシニ對シテ中蜻島ト稱シ又ハ東臺灣島ト呼ヒタリ

○位置 琉球列島ノ南端ニ近カク起リ呂宋島ノ東北ニ盡ク西ハ臺灣海峽ヲ隔テ、清國福建省ニ對シ廈門港ヲ距ル四十餘里ニアリ。北緯

二十一度五十四分ニ起リ同二十五度十八分ニ達ス西端ハ東經百二十度七分ヨリ東端ハ同百二十二度ニ亘ル長崎ノ西南海上六百三十七浬ニアリ。島形ハ槲葉狀(ナラノバ)ヲナシ南北ノ最モ長キ所、九十五里、東西ノ最モ廣キ處三十三里アリ面積ハ約二千五百方里(或二千二百方里又ハ三千四百九十二方里ト云フ前者ハ九州ヨリ稍々小ニ後者ハ九州四國ヲ合セタルヨリ稍々大ナリ實測ヲ經サレバ未詳)

○地勢

島ハ中央ヲ南北ニ亘ル一列ハ中央山脈アリテ島ハ脊梁ヲナセリ是レ火山脈ニ屬シ甚タ高峻ノ連山ヲ以テ成レリ其高度、南部ニ於テ約九千〇五十尺、北部ニ於テ約一万尺ノモノアリ中央ヨリ稍々南部ニ突起セル大龜佛山(或ハもりそん)ハ約一万二千八百五十尺ニ聳立スト云フ又中央ヨリ稍々北部ニ屹立スル祐乃武山(或ハしるばし)モ約一万二千八百尺ニ聳ヘ島内ノ双高峰ナリ・此山脈アルカ爲メ臺灣島ハ

自ラ東部、西部ニ兩分セラル。○東部ハ所謂生蕃地ニシテ從來清國管理ノ及ハサリシ所ナレハ野蠻ノ民アリテ危險多ク跋涉者稀ナルヲ以テ其詳細ヲ知リ難シト雖モ中央山脈ノ外、海岸ニモ亦一列ノ連山アリテ直ニ海ニ迫リ海岸ハ懸崖絕壁ヲナシ北部ノ嶮岸ノ如キハ高六千尺ニ壁立シ世界ニ著名ナル嶮岸ナリ、故ニ碇泊地甚タ乏シ。中央山脈ト海岸山脈トノ峽間ハ高原性ノ平地ヲナシ河流ハ一般ニ缺乏セルモノ、如シ。

西・部・ハ・地・勢・稍・々・緩・斜・シ・テ・一・般・ニ・膏・腴・ノ・沃・地・ニ・屬・ス・河・ハ・長・大・ナ・ラ・サ・ルモ處々ニ横流シテ臺灣海峽ニ入ル此等ノ流域ハ特ニ天賦ノ沃地ナリ今河流ノ重モナル者ヲ舉クレハ島ノ北端ニ注ク淡水河ハ島内ノ最大河ニシテ中央山脈ニ發シ上流ヲ大姑陷河ト云ヒ北流シテ東南ヨリ來ル志んじやむ河ヲ合セ臺北府ノ西ヲ過キ東ヨリ來ル基隆河ヲ容レ三

流相合シテ河幅四五丁ノ巨流トナリ西流シテ漚尾即チ淡水港ヨリ海ニ入ル全流約二十里アリ漚尾ヨリ臺北附近ノ大稻埕マテ從來小漁船ノ往復アリシ。○此ハ河領ハ島内ハ最要部ナリ明治廿八年夏、土賊掃攘ノ爲メ近衛兵ノ屢々苦戦セシハ此河領ナリシ其南ニ大甲溪大肚溪東螺溪、笨港河、八掌溪、層行溪、淡水溪等アレ凡皆細流ナリ故ニ清人ハ江又ハ河ト稱セシテ皆溪ト稱シタリ以上ノ諸溪ハ概子雨節ニハ河流漲溢シテ土砂ヲ流シ河口ニ堆積シ乾節ニ至レハ水乾涸シテ河道ハ人道ニ代ハルモノナリ○湖沼ハ火口湖ノ外、乏シケレトモ殆ト島ノ中央ニ龍湖アリ其他西部ノ海滨ニ一二ノ澤湖アリ是レ海岸ノ昇起ヨリ生セシモノナラン。

○沿海 東岸ハ斷崖海ニ迫ルヲ以テ良泊ノ地ニ乏シ東北ヲ指セル三貂角ノ洩底灣ハ明治廿八年五月廿九日近衛師團ノ上陸點ナリ其南

ニ蘇粵灣アリ其間ノ近海ニ小龜山島アリ以南ハ斷崖ニシテ沿岸凡五
十里ノ間、稍々碇泊ニ適スヘキハ奇萊、繡坡蘭、黑石ノ三港ノミ南端ニ拔、
搖港アリ曾テ琉球人ノ漂着シテ生蕃ニ虐殺サレシ所ト云フ島ノ最南
角ヲ南岬ト稱ス是ヨリ三十五浬ノ東海中ニ江頭嶼アリ或ハ小呂宋ト
云フ○西岸ハ東岸ニ反シ緩斜シテ遠淺ヲナシ泥沙沿海ニ堆積スレト
モ良好ノ港灣所々ニ存ス。島ノ最北角ヲ富基角ト云フ是ヨリ順次、南
ニ至レハ淡水河口ニ淡水港アリ竹塹港、香山港、鹿港、安平港、打狗港、東港
及風港アリ南角ヲ白沙又南鼻ト稱シ南岬ト相對シテ南灣ヲ抱ク小琉
球ト稱スル屬島ハ東港ノ西南海中ニアリ

沿海ニハ赤道ヨリ來ル暖流アリ島ノ南端ニ於テ二派ニ分レ一派ハ臺
灣海峽ヲ過キテ黃海ニ入り一派ハ其東岸ヲ洗ヒ北東ニ流レ九州四國
及本州ノ南岸ヲ洗フ黑潮是ナリ

●氣候 島ノ三分ノ一ハ既ニ熱帶圈ニ入レトモ他ハ熱帶地ハ如ク
炎熱甚タシカラス是レ全ク大陸ヲ距ル島地ナルニヨル年中ノ平均溫
度ハ大概二十一度乃至二十四度ニシテ鹿兒島ヨリ高キ「五度乃至九
度ナリ。北部ハ大概那霸ニ均シク南部ハ是ヨリ二三度ノ高温ナリ溫度
ノ最モ低キハ二月ニシテ平均十三度乃至十九度トス故ニ冬間モ北部
ハ東京ノ四五月頃ノ如ク南部ハ五六月ノ溫度ニ同シ。五月頃ヨリハ頗
ル暑氣ヲ覺ヘ七月ニ至リテ最高ニ達シ二十七度乃至二十九度餘ヲ平
均トシ時トシテハ四十三度、華氏百十度ニ昇ルコトアリ常ニ日中ト
夜間トニヨリ大ニ溫度ヲ異ニシ日中ハ炎熱強キモ夜間ハ冷涼ヲ感ス
ルニ至ル而シテ朝夕ヲ最モ爽快ノ時トス但シ南部ノ夏季ハ夜間モ三
十二度ヲ下ラスト云フ左ニ各月ノ溫度平均ヲ示ス（此平均ハ最高低ヲ
平均セシモノナリ）

地名緯度	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均年
淡水	二五度一〇分	一四五	二三七	一七四	二二五	二五四	二五、二	二六、五	二五六	二四、五	一九、六	一六、三	二一、六
基隆	二五度八分	一四五	一四、六	一八、八	二二二	二五、八	二六、六	二五、七	二五、四	二六、二	二四、四	二〇、六	三一、三
漁翁島	二三度三分	一六二	二三九	一七七	二二六	三、四	二四、九	二六、三	二六、一	二五、六	二四、三	二〇、七	一六、八
南沙	二度五五分	一九三	一九二	三、七	一四、四	二五、四	二六、五	二六、八	二七、一	二六、三	二一、四	二一、四	二一、六

雨量ハ一般ニ多ク晴雨常ニ定マラス特ニ北部ハ常ニ多雨ナリ左レト
略々二期ノ雨節アルカ如シ。ハ冬ニ始リテ春ニ至リ。ハ晚春ヨリ晚
秋ニ至ル中ニモ九月ヲ以テ最多ノ月トス。淡水ノ全年雨量ハ二千三百
耗(七尺)^(三寸)ニシテ基隆ハ三千九百五十耗(二丈)^(三尺)ノ多量アリ然レバ南部ニ至
ルニ隨ヒ次第ニ雨量ヲ減ス是レ北部ハ黑潮ノ上ヲ渡リ來ル北東風多
キニヨリ多雨ナリ。南半ハ年中殆ト雨節乾節ノ兩期ニ分ル雨節ハ五
月ヨリ九月ニ至ル五ヶ月間ニシテ乾節ハ其餘七ヶ月間ナリ雨節ハ即

チ西南風ノ吹ク間ニシテ海上ヨリ來ル多濕ノ風アリ恰モ本國ノ梅雨
期ト同様ナリ乾節ハ北東風期ニシテ中央山脈ヲ超ヘ來ル旱風ナレバ
ナリ而シテ年中ノ雨量ハ安平ニ一千六百耗、打狗ニ一千七百耗アリ
臺灣島ハ年中概子風強ク砂塵ヲ揚ケテ快カラス特ニ十一月頃ハ北東
風ノ最モ強烈ナル期ナルヲ以テ北部ノ海上ハ波濤穩ナラス又八九月
ノ交、本國ニ襲來スル颶風ハ其起點概子本島南方ノ冲合ニアリ其進路
多クハ嶼ノ東岸ヲ沿フテ北東ニ進ミ本國ヲ衝クヲ以テ此始起ノ暴威
ヲ受ケ損害渺ナカラス

●產物 本嶼ノ生産物ニ富ムコトハ曾テ支那海中ノ金匱ト稱セラ
レタリ○先ツ農產[◎]ニ就テ觀ルニ地味ハ一般ニ甚タ肥沃ニシテ且^ツ
高温ナルヲ以テ能ク各種ノ植物ニ適ス。特ニ北部ハ雨濕多キヲ以テ米
作ニ適シ淡水河流域ハ最モ良田ニ富ミ一年ニ兩度ノ收穫アリ南部ニ

ハ三回、ノ收穫アリ。一年ノ米ノ產額ハ全島住民三年間ノ食ヲ支フルニ足ルト云フ〇本島輸出ハ最多額ヲ占ムルモノハ茶ナリ年々輸出スル價額ニテモ六百萬圓ニ下ラス、而シテ其販路ハ一旦、廈門港ニ廻送シ其九分ハ米國ニ残リハ英國、其他ニ轉送ス茶樹ノ栽培所ハ所々ノ高地ニシテ熱ト濕トノ爲メ著シク繁茂シ一年ニ七八回摘採スヘシ其質ハ彼ノ世界ニ名高キ烏龍茶ハ實ニ此地ノ產ナリ〇砂糖ハ亦本島ノ重要產ニシテ臺南地方ハ主ナル甘蔗ノ產地ナリ年々安平港ヨリ輸出スル價額ハ二百萬圓内外アリ其販路ハ支那及我本國ニシテ從來我邦人ハ年々二千五六百萬斤ハ臺灣砂糖ヲ需用セリ〇甘藷ハ凹地ニ植ヘテ土民主要ノ食料タリ藍ハ良好ノ藍靛ニシテ煙草モ品質宜シ・其他麥・豆類・落花生・鳳梨等アリ

山地ニハ樟・楓・桐・榕・紅木・黑木・孟宗竹・椰樹・檳榔等ノ樹

木薔薇トシテ茂生セリ是レ美麗島ノ名アル原因ナリ特ニ樟ノ巨樹ハ頗ル多ク樟腦ニ製シテ輸出スル年額一百萬圓以上ナリ

森林ノ間ニハ諸種ノ野獸多ク大概本國ノ野獸ト同種ナレトモ本國ニ於テ見サルモノハ豹・水牛・山猫ナリ最モ多キハ鹿・猪ニシテ鹿獵ハ土人等ノ一生業ナリ

鑛物ハ未タ明確ナラサレトモ石炭・石油・硫黃・金等ニハ富メリ石炭ハ島内處々ニ炭層ヲ有シ現ニ基隆附近ニハ一百ハ炭坑アリ之ヲ掘採シテ鐵道ニヨリ輸出スルハ所謂臺灣炭ナリ硫黃ハ火山地方所々ヨリ產スルモ北部ノ舊火山ヨリ產スルモノヲ主トス。金ハ北部ニ金脈ヲ發見シ其附近ノ溪流ヨリハ砂金ヲ產ス

○處誌 本島ハ地勢ニヨリ之ヲ東部・西部ニ分ツ東部ハ臺東州ニシテ西部ハ更ニ臺北・臺灣(臺)臺南ノ三縣ニ分ツ

臺北縣ハ即チ臺北府ヲ以テ中心トス此府ハ臺灣總督府ヲ置キ全島ヲ管スル處ナリ、明治二十八年六月十四日樺山總督始メテ入府シ總督府ヲ開始セリ此府ハ元ノ淡水ニシテ清領ノ時臺灣巡撫劉銘傳以來首府ト定メシ所ニシテ淡水河右岸ニ建チ周邊山巒ヲ繞ラスハ京都ニ類シ淡水河ヲ帶ブハ鳴川ニ似タリト云フ者アリ人口二十萬(附近ノ市ヲ合シ許アリ商人ハ大抵清國福建人ナリ市街ノ規模廣闊ニシテ他ノ支那街ノ如ク不潔ナラス電燈市内ヲ照ラシ馬車人力車アリテ自在ニ市内ヲ往來シ鐵道ハ市ノ北邊ヲ通セリ故ニ交通最モ便ニ鐵道ニヨレバ二十哩ニシテ基隆港ニ達シ水路ハ五里ニシテ淡水港ニ達スヘシ府ノ近傍淡水河ニ臨ミ大稻埕及艋舺アリ大稻埕ハ人戸五百許甚々繁昌セリ。艋舺ハ舊來ノ市街ナリ產物ハ此地ヨリ船ニヨリテ他方へ出シ或ハ外來品ヲ上陸ス・滬尾港ハ淡水港口ニメ臺北府ヲ距ルコト凡五里淡水

河口ノ東岸ニアリ人戸千餘河ニ臨ミテ建テリ河口ノ幅ハ十七八町ニ及ヒ船舶常ニ輻湊ス此港ハ曾テ清國ニ長髮賊起リシ時英佛ノ力ニ藉リテ平定シタル報酬トシテ開キタル貿易港ナリ砂糖ノ輸出最モ盛ナリ其他石炭茶樟腦等ノ輸出アリ・基隆港(或ハ雞籠ト書ス)ハ臺北府ノ東北凡ソ九里滬尾ヨリ海路凡二十五浬島ノ北東角ニアリ長崎ヨリ六百三十、七、哩本國ト來往ノ門戸ナリ臺灣鐵道ノ起點ニシテ臺北府ヲ經テ新竹(支廳ヲ置ク)ニ通セリ此間約五十哩アリ此港ハ山ヲ負ヒ水澄ミ港門ニばるも島及基隆島横ハリテ風ヲ遮リ臺灣第一ノ良港ナリ人戸凡七百五十アリ此近傍石炭ニ富ミ現ニ炭坑七十餘アリ中ニモ八斗炭、坑ハ港ヨリ二里鐵道ニヨリテ運搬シ掘採最モ盛ナル輸出ノ重モナルモノハ石炭トス○其外臺北縣ニハ基隆ノ南ニ暖々街アリ其東ニ烏石港アリ其南ニ突出スルヲ三貂角トス宣蘭ハ既ニ島ノ東岸ナレトモ從

來臺北府ヨリ管轄セル縣治ノ在リシ所我領ニ歸シ支廳ヲ置ク所ナリ其東南ノ一港ヲ蘇澳港ト云フ生蕃地ト境ヲ接セリ
臺灣縣ハ即チ臺灣府ヲ中心トシ西部ノ中央地方ヲ稱シ東ハ中央山脈至ル臺灣府ハ明治廿八年八月廿六日近衛師團ニヨリ占領セラル我政廳ヲ置ク所ナリ明治二十年劉銘傳ノ改革前ハ臺灣縣ト稱シタリシヲ改メテ府トナシタリ大肚溪ノ中流ニアリ溪ヲ下レバ彰化アリ同廿八年山根枝隊ニヨリテ占領セラル其河口ハ鹿港ナリ本港ハ殆ト島ノ中央ニ位シ彰化縣ノ要港ナリ曾テ清佛戰爭ニ際シ臺灣各港ハ悉ク佛艦ノ爲メ封鎖セラレタレハ島内ノ清人ハ總テ此港ニヨリ本國ト聲息ヲ通シタリト云フ。八月廿八日近衛師團ノ急先鋒ノ爲メニ占領セラレタリ臺灣府ノ東生蕃地ニ捕裏廳アリ捕裏廳ノ北ニ苗栗アリ南ニ雲林アリ清領ノ時共ニ縣治ヲ置キタル地ナリ

臺南縣ハ即チ臺南府ヲ中心トシ島ノ西南部ナリ臺南府ハ我政廳ヲ置ク所ナリ明治二十年以前ハ全島ノ首府ニシテ直ニ臺灣府ト稱シタリ。人口凡十四萬アリ府ハ方形ノ高壁ヲ以テ圍マレ恰モ北京城ニ類ス郭内ニハ官舍豪家寺院等アリ又頗ル美麗ナル公園様ノモノアリ海岸ニ近ク和蘭人ノ建築ニ係ル大城壘ノ故址アリ一千六百三十年本島ヲ固守スル爲メ築ク所ナリ後城内ニモ亦一城ヲ築ケリ所謂紅毛城是ナリ蘭人ノ此島ヲ去リシ後明ノ鄭成功此府ニ據リテ全島ヲ管セリ○安平港ハ外國トノ貿易港ニシテ臺南府ノ西北一里許ニアリ人戸凡六百ヲ有ス港内ハ廣カラサレトモ風波ノ險少ナシ貿易品ハ砂糖ヲ重モナリトス市中ニ蘭人ノ據リシ赤嵌城依然トシテ尙ホ存セリ。打狗港ハ臺南府ノ南十二里ニアリ一岬嘴長ク南ヨリ出テ、一灣ヲ抱キ自ラ良港ヲナセリ然レトモ港門狭クシテ砂多ク大船ヲ入ル、ニ便ナラズ且ツ西南

風強キ日ハ碇泊シ難キノ不便アリ此港ハ專ラ砂糖ノ輸出場ニシテ各地ニ配送セラル、モノ少ナカラス・港ノ東二里半ニ鳳山縣アリ臺南府ニ亞ク一大鎮ナリ市内製糖業盛ナリ・鳳山ノ南六里ニ東港アリ一海市ニシテ人口二千餘アリ其南ノ枋寮ハ臺南最南ニシテ生蕃ト境ヲ接セリ

臺東部ハ即チ生蕃地ヲ總稱ス生蕃地ハ種族ニヨリ大別シテ五社トス最北ナルヲたんごう社トシ次ヲしぶくーん社次ヲそあまはん社次ヲばんたん社最南ヲ牡丹社ト云フ。生蕃ハ政府ナク宗教ナク文字ナク曆日ナキ野蠻ノ民ナリ生蕃地ノ最モ盛ナルヲ臺東州トスばんたん社ニアリ其地ヲ水尾ト云フ清領ノ時、知事ヲ置キ專ラ蕃地ノ開發ニ任セシメタリ○牡丹社ハ稍々開進セリ明治七年征臺之役我軍ノ專ラ征服セシハ此地ナリ最モ慄悍ノ土蕃ニシテ東岸ノ拔搖港ハ琉球人ノ漂着シ

テ虐殺サレシ所ナリ・恒春ハ南部ノ小都邑ナリ島ノ尖部ニアリ以南ノ地形ハ東西兩岬ニ分レ東ハ南岬ト稱シ島ノ最南端ニシテ併セテ我版圖ノ最南ナリ遙ニ西領比律賓島ト相對ス西ハ白沙又南鼻ト稱ス

●住民 人口ハ實際ノ調査ナク且ツ生蕃ノ如キ殆ト概數ダモ知リ難キヲ以テ果シテ幾許ノ人口ヲ有スルヤ固ヨリ精確ナラス測算者其人ニヨリテ其數ヲ異ニス少キハ七十餘萬ヨリ多キハ七百餘萬ト云フモノアレ凡恐ラクハ二百萬乃至三百萬ハ實數ニ近カルベキカ。住民ノ大部ヲ占ムルモノハ勿論支那人ニシテ彼等ハ既ニ二三百年來支那大陸ヨリ移住シタルモノニシニ福建人ヲ多シトス本島ノ原住人ハ即チ現ニ島ノ東部ニ住スル生蕃ナリ彼等ハ人種ノ何レニ屬スヘキカ明ナラズト雖凡其性格ニ於テハ殆ト馬來人種ナリ又其言語、習慣等ニ於テモ明ニ馬來人ニ類シ其他ニ於テモ南洋島人ニ類スル所アルヲ以テ

或ハ元ト馬來群島ヨリ漂民本島ニ沿フテ流ル、黑潮ニ隨ヒ漂着セルモノニアラサルヤトノ說アリ且ツ近二十年間、比律賓群島ノ土人、暴風ノ爲メ本島ニ漂着シタル者多ク又昆蟲及植物ノ黑潮ニヨリテ南洋島ヨリ移植セラレタル確證アルヲ以テ益々前說ノ確實ナルガ如シ。生蕃ハ今尙ホ頑愚粗暴ノ蠻民ニシテ常ニ爭鬪ヲ事トシ清國人ヲ敵視スルヲ實ニ酷タシ成ヘク清人ヲ多殺スルヲ以テ榮譽トシ諸處ノ寺院(?)ニテハ清人ノ頭顱ヲ以テ供物トス又祭祀ノ時、禮拜スル物ハ鹿豕熊ノ三顱骨ヲ以テ裝飾セル楹柱ナリ常ニ弓箭或ハ清國製ノ武具ヲ携ヘ大ニ獵ヲ好メリ男女共ニ面ニ黥スルノ風アリ。

○沿革時事　臺灣ノ始メテ發見サレシハ我紀元二千〇九十年ニシテ(足利義教ノ頃)支那人暴風ニ遭ヒ漂着シタルヲ初メトスト云フ、其後支那トノ間ニハ屢々往來アリシモ固ヨリ支那人ノ領有ニ歸シタルニ

ハアラサリシ然ルニ我戰國ノ末、中國、四國、九州等ノ沿海民、和船ニ乗シテ潮流ヲ便リ本島ニ航シテ夙ニ其北部及澎湖島ヲ略取セリ其巨魁ハ伊豫ニ據リシ村上氏、河野氏等ニシテ海賊大將軍ノ威名支那近海ニ振ヒタリ爾來凡五十年間、徳川氏ノ元和年間(秀忠)マテハ全島悉ク我邊民ノ占領スル所ナリシ。紀元二千二百九十四年和蘭人來航シテ今ノ臺南府ニ據リ赤嵌城ヲ築キ砲臺ヲ設ケ港口出入ノ權ヲ占斷シ海上ノ權、全ク我ヨリ移リテ蘭人ノ手ニ歸セリ其後支那人ト蘭人トノ間ニ爭鬪アリハ鄭芝龍及其子鄭成功ノ如キ是ナリ。鄭成功ハ明朝亡ヒテ清朝ニ仕フルヲ欲セズ本島ニ脱シ來リテ澎湖及本島ノ蘭人ヲ追ヒ遂ニ本島ヲ東都ト稱シ臺南城ヲ承天府ト云ヒ大ニ全島ヲ開發シテ其面目ヲ改メタリ、其後鄭氏ノ政衰ヘテ遂ニ清朝ノ爲メニ征服セラレ其版圖ニ歸セシ

ハ我紀元二千三百四十三年(天和三年)ニシテ清ノ康熙二十二年ノコトナリシ。其後、朱一貴ナル者亂ヲ起シ全島ヲ横奪セシコトアリ。明治四年琉球ノ漂民、牡丹生蕃ノ爲メニ虐殺セラル。是ニ於テ同七年四月、西郷從道ヲ都督トシ之ヲ征シ南部ノ生蕃悉ク我順民トナル。即チ同年十二月ヲ以テ凱旋ス。明治十七年清佛戦争ノ後、清國ハ劉銘傳ヲ以テ臺灣巡撫ニ任ス。同二十年、銘傳大ニ内治ヲ改メ専ラ島地ノ開發ニ銳意シ新ニ鐵道電信ヲ設ケタリ。鐵道ハ基隆ヲ起點トシ臺北、新竹、臺灣ヲ經テ臺南ニ達セシムル計畫ナリシモ種々ノ故障ノ爲メ遂ニ果サス。基隆ヨリ新竹マテハ既ニ落成シ新竹、臺灣間ハ測量済トナレリ。電信ハ從來、打狗、臺南間ノミ架設セシヲ延長シテ臺南ヨリ臺北ヲ經テ基隆ニ達スル線及其他全島重要ノ市街ハ大抵通セサル所ナキニ至レリ。且ツ安平ヨリ澎湖島裏正角ニ至ル海底線ト淡水ヨリ清國福建省ノ閩江ニ達スル海底

澎湖列島

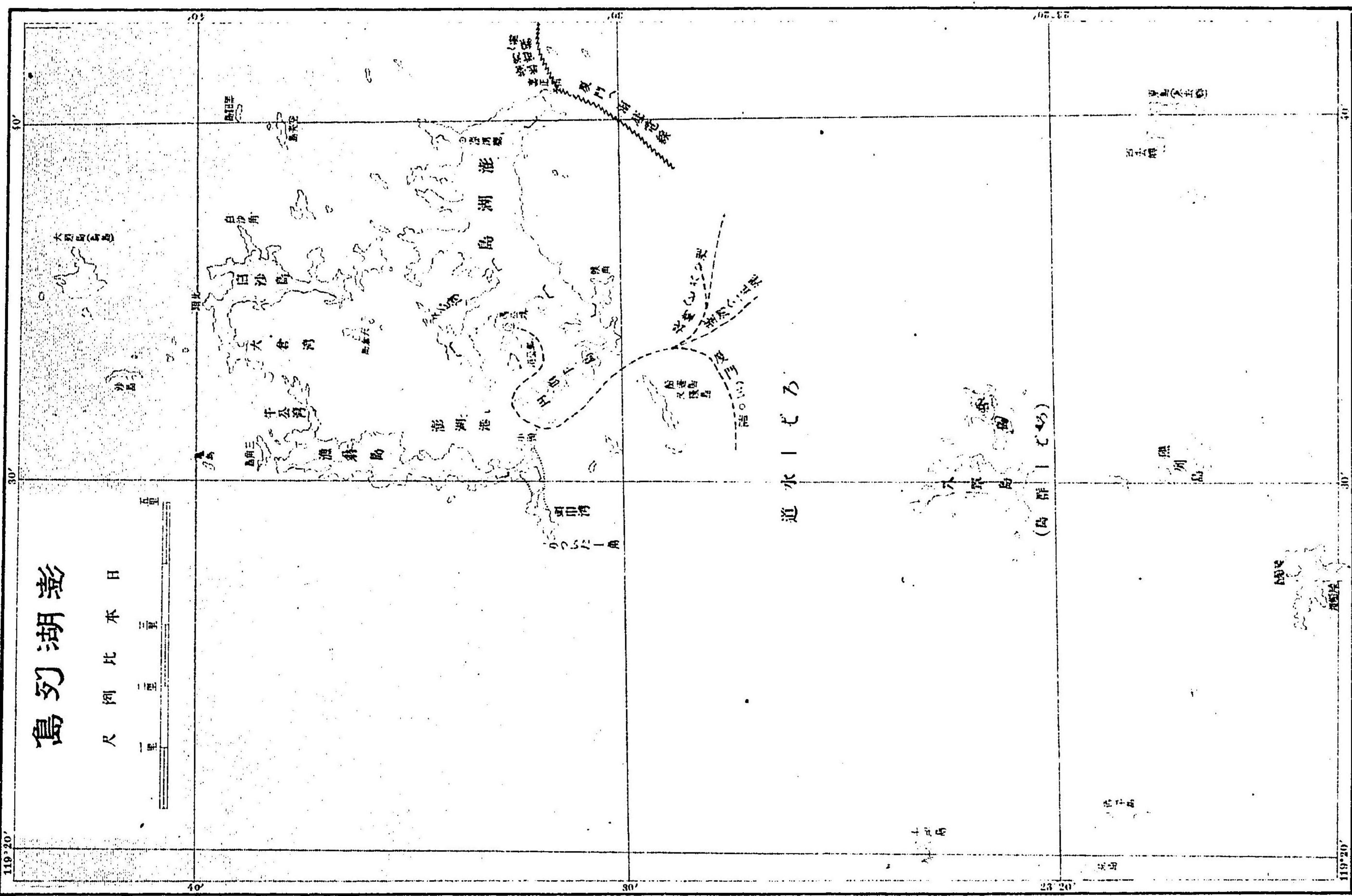
日本水尺

五里一里

三里一里

一里一里

半里半里



線アリ。其後劉永福、吳景淞相次テ巡撫トナリ以テ現今ニ至レリ而シテ本島ノ我版圖ニ入ルヤ土民之ヲ快トセス吳景淞ハ亂民ノ爲メニ推サレテ大統領トナリ本島ニ共和政ヲ建テントセシモ我近衛師團ノ進軍ニ遭ヒ忽チ清國ニ奔竄シタリ然レバ餘賊尙ホ我兵ニ抗セシモ近衛ノ精兵ハ難ナク賊ヲ掃ヒ明治二十八年五月廿九日三貂角ニ上陸以來六月四日ニ基隆ヲ略シ六月七日臺北府ヲ戡定シ茲ニ臺灣總督府ヲ設ケ本島始メテ王化ノ餘澤ニ浴スルヲ得ルニ至レリ

(二) 澎湖列島

澎湖島ハ明治二十八年三月二十三日、名譽、アル比志、島義輝、枝隊第一及第六師團ノ後備兵ノ占領ニヨリ下ハ、關條約ヲ以テ全ク我版圖ニ歸セリ。本島ハ西洋人ノペサカガ（Pescadores I.）ト稱セシ島ニシテ我國ヨリハ臺灣ヲ高砂島ト稱セシニ對シテ眞砂島ト云ヒ或ハ中靖嶼ニ對シ小マサゴジ

蜻嶼ト呼ヒ又東臺島ニ對シ西臺島トモ呼ヒタリ

●位置 列島ハ臺灣ト清國福建トノ間、即チ臺灣海峽ニ横ハル。大小二十。島及數箇ノ岩嶼ヨリ成リ北緯二十三度十一分ヨリ同四十七分ニ至リ西端(高島)ハ東經百十九度十六分ヨリ(我版圖ノ極西ハ東經百十九度トス)東端ハ同百十九度四十分トス。臺灣島ヘ海路二十五哩廈門ヘ三十哩又長崎ヲ距ルコト七百六十哩トス

●地勢 列島ノ中大ナルモノ三箇アリ澎湖島ハ其主島ニシテ長サ約五里アリ漁翁島及白沙島之ニ亞ク此三島巴^{トモエ}ノ如ク相對シテ一内海ヲ擁ス内海ハ馬公・澎湖・大倉ノ三港灣ニ別ル、三大島ニ次キ稍々大ナルハ北ニ大烈島アリ南ハろばー水道ヲ隔テ、八罩島・倉島アリ(ろト群島^{トモス})尙ホ倉島、我圖南軍カ第一ノ根據地ト定メシ所ナリ其南ニ矮船島アリ面積ハ總シテ壹岐ト伯仲ス・以上ノ諸島ハ概シテ平坦ニシテ

所々ニ丘陵アレトモ海面ヲ拔クコト三百尺以上ニ達スルモノナシ
●沿海 澎湖島ハ西北ニ向ツテ岬灣出入シ島ノ南端ヨリ長ク西ニ挺出スルヲ圓頂半島ト云ヒ内ニ馬公港(或ハ媽宮港)アリ港内ニハ嵐礁所々ニ崛起ストモ臺灣附近屬指ノ良港ニシテ優ニ船艦數隻ヲ容ルニ足ル南東角ヲ候角ト云ヒ東出ノ岬ヲ裏正角ト稱ス此角ハ我比志島枝隊ハ上陸點地ナリ此地ヨリ臺灣及廈門ニ海底電線ヲ通セリ○漁翁島ハ南北ニ長ク西南角ヲりついた一角ト云ヒ燈臺ノ設アリ本島ト澎湖島トノ間ハ澎湖港ナリ○白沙島ト漁翁島トノ間ヲ大倉灣ト云フ
●產物 氣候ハ臺灣ニ類ストモ稍々平和ナリ○地味ハ一般ニ不良ニシテ細沙ニ石ヲ混シ殆ント農耕ニ堪ヘス且ツ一年ノ過半ハ北東風流行シ其猛威ニヨリ樹木ナク唯々海岸沙洲ノ上ニ簇生スルモノハ『たなを』ト稱スル草ノ一二丈ニ及ヒ恰モ竹林ノ如キ觀ヲ呈スルノミ○

農產物ハ僅ニ馬鈴薯・玉蜀黍・花生等ニ過キス故ニ島民ノ生業ハ漁業ヲ主トシ其常食モ魚貝トシ乾魚ハ島内唯一ノ輸出品ナリ食料、被衣、日用品等ハ臺灣及清國ニ仰ク物アリ

○住民 全島ノ人口ハ約六千五百アリ性質ハ質樸ニシテ害意ナシ生活ハ皆貧賤ニシテ微カニ海業ニヨリテ生ヲ營ム家屋ハ泥土草筵ヲ以テ構造シ甘蔗ヨリ酒精ヲ製シテ飲用ス

○處誌 馬公城ハ島内ノ首都トモ稱スヘキ地ニシテ馬公港ノ北岸ニアリ周圍ニ城壁ヲ繞ラシ廣サ約半哩アリ城内ハ市街縱横ニ開通シ内ニ舊清國ノ兵營・官署アリ比志島枝隊ノ占領後惡疫ト戰ヒシハ此地ナリ市街ノ前岸ハ小舟ノ集泊所ナリ

島ノ東岸ニ澎湖廳アリ圓頂半島ニ砲臺アリ最後マテ我軍ニ抵抗シタリ

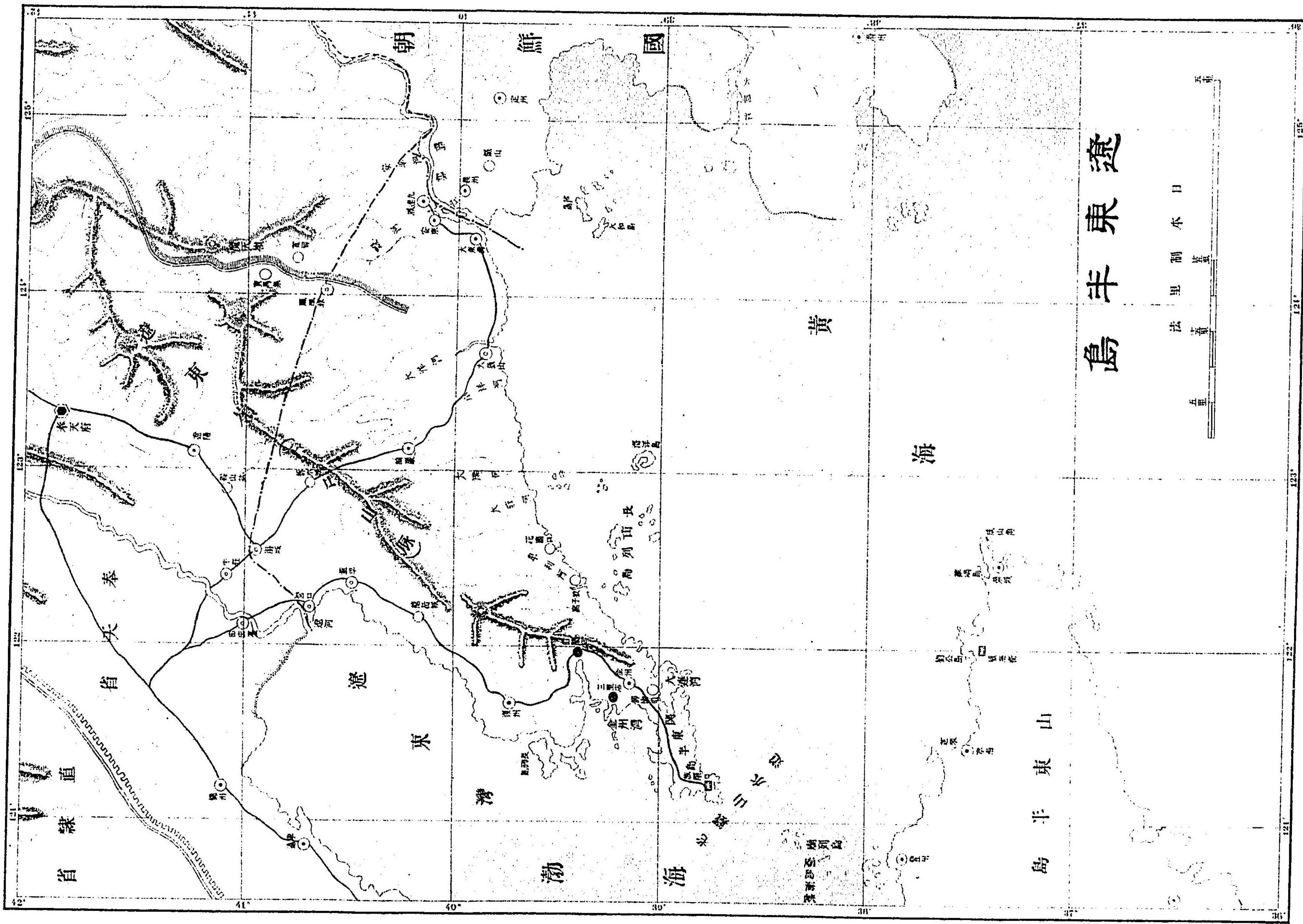
○沿革

列島ハ元來本邦人ノ占領セシ所ニシテ元ノ代ニハ邦人源維綱之ヲ領シ其歸朝後ハ佐賀俊平代リテ之ヲ領シ其後倭寇三長ノ一人長田策兵衛之ヲ領シ次テ長田作藏之ヲ領セリ明ノ代ニ至リテ支那海賊曾一本林鳳等之ニ據レリ又高文律ナル者此島ニ據リ山ニ依リラ城ヲ築キ海ヲ環ラシテ池トナセリ又彼ノ鄭成功モ本島ヲ根據地トセリ清佛ハ戰ニ佛ノ提督ぐるべい圓頂半島ヨリ上陸シ遂ニ本島ヲ占領シテ臺灣ニ當ルノ根據地トセリ佛軍占領後清國ハ頗ニ守兵ヲ増シ所々ニ砲臺ヲ新築シ馬公・圓頂・候角・小頭(島翁)ノ諸砲臺ノ如キハ頗ル堅固ヲ以テ稱セラレタリ征清ノ役ニハ海陸ノ守兵約五千ヲ以テ防禦セシモ我後備兵ヲ以テ成ル勇敢ナル比志島枝隊ハ難ナク全島ヲ占領シタリ

(三) 遼東半島

遼東半島ト稱スルハ清國奉天省ノ南部半島ニシテ即チ鴨綠江口ヨリ該口ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城・海城・營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地、及其諸屬島ヲ云フ。以上ノ壞地ハ下ノ關條約ニ據リ我領地ニ歸セリ然レトモ露西亞、獨逸兩帝國及佛朗西共和國ノ忠言ヲ既ニ納レ還附ニ決シタリト雖凡一旦、我領地ニ歸シ且ツ將來ハ益々親密ノ關係ヲ有スペキ地ナルヲ以テ特ニ其地ノ概要ヲ記スヘシ。

● 境域 遼東半島ハ西ハ遼河ニヨリテ清國奉天省ナル田庄臺地方ニ境シ北ハ遼陽州ニ接ス東ハ鴨綠江ヲ隔テ、朝鮮國平安道ニ對シ東北。ヨリ斜ニ黃海中ニ突出シ直隸海峽ヲ隔テ、遙ニ山東半島ト相枕ミ以テ渤海灣(或ハ直隸灣)ノ口ヲ扼ス。半島ノ長サ六十七里幅廣キ所ハ約五十九、アリ面積ハ約二千五百七十六方里アリト云フ(九州二千三百里)



●地勢

滿州大陸ヲ組織スル所ノ長白山(東方)

及ヒ岱揚阿登山(北方)

ノ諸脈高原狀ヲナシテ鴨綠江及遼河ノ間ヲ走リ分水嶺又ハ摩天嶺等
ノ名ヲ以テ南々西ニ向ヒ黃海ニ突出スル半島ナルヲ以テ半島ノ中央
部ハ高原起伏シ之ヲ橫過スルコト頗ル困難ナリ該山脈ヲ總稱シテ遼
東嶺或ハ千山山脈ト云フ○海岸ノ地ハ緩斜地ヲ存シ大河邊ニハ頗ル
廣大ナル平野アリ即チ鴨綠江口ノ大東溝平野ハ大洋河平原ト連リ方
四五十里ニ亘ル又遼東附近平原方五六十里ニ亘ル平原アリ

半島ハ南部ニ至リテ大ニ缺損シ金州地頸ニ於テハ大連、金州ノ兩灣。左
右ヨリ浸入シテ僅ニ數町ニ窄マリ再ヒ廣カリタルヲ關東半島ト稱シ
遂ニ老鐵山角ニ至リテ盡キ遙ニ山東ノ登州ト相對スル間ノ直隸海峽
ニハ廟列島、並列シ水道數條ニ別レ我領遼東ニ近キヲ老鐵山水道ト云
ヒ山東ニ近キヲ廟島海峽ト云フ。抑々遼東半島ノ地勢ヲ案スルニ蓋シ

對岸ハ半島トハ其地脈相連絡スルモノニシテ兩半島ノ互ニ相挺出シ廟列島ノ其間ニ碁布スルハ地脈ノ海表ニ現ハレタルモノナリ。黃海中ニモ亦長山列島點散シ其海洋島附近ノ海面ハ實ニ明治二十八年九月十七日我聯合艦隊司令官伊東(亨)中將十二隻ト清國北洋艦隊十二隻水雷艇六隻ト激戦シ清艦揚威、超勇ヲ始メ六隻或ハ沈没シ或ハ燒失シ我艦隊大勝利ヲ得シ所ナリ。

○河流 半島ノ中央ハ高臺ナルヲ以テ河流ハ皆中央高地ニ分水セラレテ兩側ニ下ル鳴綠江、遼河。モ半島ノ北部高地ニ分水セラレ左右ニ流ル、モノナリ。半島部ニ至レハ高臺海岸ニ迫ルヲ以テ巨流ナシ○其東南流シテ黃海ニ入ル最大流ヲ大洋河。トシ其源ハ清國奉天省ノ摩天嶺南麓ヨリ發シ四五派ノ渾流ヲ容レ凡四十五里ニシテ大孤山港ヨリ黃海ニ注ク河口ニ近ク大小ノ鹿島アリ遙ニ長山列島ヲ望ム。

○氣候 位置ヲ問ヘハ北緯三十八度四十一分ヨリ同四十度五十三分ノ間ニ亘リ我羽後、陸中地方ト同緯度ニアリテ氣候上ノ好位置ヲ占ムレトモ西北部ハ直ニ寒暑共ニ酷烈ナル大陸ニ接スルヲ以テ寒暑甚タ強ク冬季ハ西伯利内地ヨリ東南日本海ニ向テ吹ク冽寒ノ風アリ此

トスルノミ

○氣候 位置ヲ問ヘハ北緯三十八度四十一分ヨリ同四十度五十三分ノ間ニ亘リ我羽後、陸中地方ト同緯度ニアリテ氣候上ノ好位置ヲ占ムレトモ西北部ハ直ニ寒暑共ニ酷烈ナル大陸ニ接スルヲ以テ寒暑甚タ強ク冬季ハ西伯利内地ヨリ東南日本海ニ向テ吹ク冽寒ノ風アリ此

風ハ蒙古沙漠ヲ通過スルヲ以テ乾燥甚シク所謂凜冽、膚ヲ勞^{ツンザ}カ如ク總テノ液類概子氷結セサルハナク遼河ノ如キハ毎年十一月下旬ニ至レハ堅氷ヲ結ヒ三月中旬ニ至ラサレハ融解セス故ニ四箇月間ハ河水氷結ス嚴冬祁寒ノ日ニハ氷點下四十度以下ニ降ルヲアリ然レ毛此季ハ濕氣少キヲ以テ雪ナク天氣概子清朗ナレハ風無キ時ハ溫暖恰モ春ノ如キ日アリ。春晩ノ候ヨリ遽ニ高温トナリ夏季ハ暑氣意外ニ強ク時トシテハ三十四、五度ニ昇リ我九州地方ニモ稀ナル酷暑ヲ感スルコトアリ、然レトモ是レ只日中ニシテ夕陽没スレバ忽チ冷氣トナリ夜間ハ殆ト寒ヲ覺ユ此季ハ濕氣多ク時々強雨ヲ來シ草木一時ニ繁茂セリ○之ヲ要スルニ寒季ハ一年ノ三分ノ二ニ亘リ其一分ハ暑期ニシテ殆ト春秋兩季ノ好時節ナシ同地方ニ於テ氣象ノ實測ヲ經タルハ營口ノミナルヲ以テ同所ノ氣候ヲ示ス

營口氣象(東經一百二十二度四十一分北緯四十一度四十一分)

摘要 別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
平均溫度	(一)二六〇	(一)二七五	(一)二九〇	(一)二八六	(一)二五七	(一)三〇〇	(一)二五四	(一)二四二	(一)二八五	(一)一〇三	(一)三二	(一)七〇	八四
平均最高溫度	(一)二三三	(一)二六九	(一)二三〇	(一)二三三	(一)二六六	(一)二九四	(一)三一〇	(一)三三二	(一)二六六	(一)二二四	(一)二五三	(一)六九	三三〇
平均最低溫度	(一)三七一	(一)二七五	(一)二三〇	(一)二八	(一)五八	(一)三七	(一)一八九	(一)一八九	(一)七五	(一)〇八	(一)八六	(一)九二	三三七
雨雪量	一三	一五	〇〇	六四	五五〇	四六七	二二三	一〇三	一〇三	三八	二五四	八七	三二五七一

故ニ全年ノ平均溫度ハ函館ニ比スヘキモ暑候ト寒候トハ頗ル強ク暑氣ハ九州若クハ琉球ニ比スヘク寒氣ハ之ニ匹敵スル所ナシ雨ハ全年ヲ兩分シテ十二月ヨリ翌四月マテハ甚タ少ク其餘ハ稍々多ク七月ヲ以テ最多トシ一年ノ全量ハ北海道ノ最寡部ヨリモ少シ

●產物 遼東半島ノ地質ハ概子古代ニ生成セル硬岩ヲ以テ構造セラレ特ニ半島中央ノ大部分ハ花崗質岩ヨリ成リ海濱ノ低地モ其破碎

セル砂礫ニシテ埴土ノ平地ニ乏キヲ以テ地味一般ニ肥沃ト謂フヘカラス且ツ前述ノ如ク寒威強ク雨濕乏キヲ以テ農產物ニ適當ナラス故ニ米麥等ノ穀類ヲ產セス半島民ノ藉リテ以テ生活スルハ黃梁(玉蜀黍)ノ類ナリ到ル處ノ平地ニ之ヲ植エ其產額頗ル多ク土民是ヲ以テ常食トシ其種ハ燃料トナリ併セテ防寒必要ノ品ナリ・黃梁ニ次ク農產品ハ豆類ナリ重モニ各地ニ輸出ス(次ニ示ス表ヲ看ヨ)其他ハ人參等ヲ産スルニ過キス

牧畜ハ適セサルニアラスト雖トモ盛ニ行ハル、ニアラス牛・羊・馬等ハ稍々多シ然レトモ却テ野生ノ鹿・山羊ハ其角及皮ノ輸出スルモノアリ(後表ヲ看ヨ)一種野生ハ蠶アリテ生糸ヲ產ス

樹木ハ半島部ニハ殆ト之ナシト雖トモ長白山ニ近ヅクニ隨ヒ次第ニ山林ヲ増シ北部内地ニハ廣大ハ深林アリ良材ノ鴨綠江ヲ下リテ安東

縣及大孤山港ニ集マリ又遼河ヲ下リテ牛莊、營口ニ來リ清國各地ニ輸出スル額年々夥シト云フ

今牛莊(營口)ニ於ケル明治二十六年度ノ貿易景況ヲ示セバ同年度ノ貿易全額ハ一千七百六十六萬兩(一兩ハ約一圓五十五錢ナリ)ニシテ内該港ヨリ輸出シタル額ハ九百三十一萬兩ナリ其内十萬兩以上ノ物品ハ左表ノ如シ

大豆 四百三十九萬三千兩

豆餅 二百三十二萬七千兩

人參 七十四萬二千兩

野蠶糸類 十四萬九千兩

鹿角類 十四萬四千兩

山羊皮及犬皮

以テ產物ノ一斑ヲ知ルヘシ鑽物ノ如キハ未タ著シカラス海產物ハ鹽

魚ノ小額ヲ出スノミ

○處誌 遼東半島ハ古ヨリ遼東ト稱セラレ遼河以東ノ地ナルヲ以テ名ケラレタリ鴨綠江右岸ノ一部ハ曾テ韓領ナリシト云フ清朝ハ之ヲ奉天省ニ屬セシメ本部ノ十八省ト同制度ノ下ニ置ケリ這回新ニ我帝國領ニ歸セシ域内著名ハ城市ハ概子左ノ如シ

安東縣

九連城

鳳凰城

岫巖州

樺木城

海城

缸瓦寨

以上東北部

大連灣柳樹屯

金州

旅順口

復州

蓋平城

營口

以上西南部

右列舉スル所ノ各地ハ征清之役ニ關シテ人口ニ膾炙スルニ至レリ且ツ將來我邦人ノ記憶ニ存スルヲ要スル所トス則チ右等ノ各城市ハ明治二十七年ヨリ翌二十八年ニ亘リ我第一軍(第五廣島第三屋古)ノ兩師團ヲ以テ成ル司令官野津陸軍大將及第二軍(第一東京第六熊本)ノ兩師團ヲ以テ成ル司令官大山陸軍大將ニヨリテ悉ク占領セラレタリ故ニ左ニ第一軍ノ占領地ナル東北部ヨリ順ヲ以テ第二軍ノ占領地ナル西南部ニ記シ及ホスヘシ

抑々我陸軍ノ始メテ舊清國領地遼東ノ地ニ進入シテ之ヲ占領セシハ朝鮮平壤ノ清兵ヲ破リテ義州街道ヨリ進ミタル第一軍ノ枝隊佐藤、大佐ハ率ユハ歩兵第十八聯隊(豐原)ニシテ同隊ハ明治二十七年十月二十三日朝鮮義州ノ東方約四里ノ地水口鎮ヨリ安平河口ヲ渡リテ清領ニ突進セシヲ始メトシ其廿五日ニハ鴨綠江ノ架橋成リテ第一軍ノ内桂中

將ノ率ユル第三師團ノ大部ハ鴨綠江ヲ渡リテ其右岸ナル清國領地ヲ占領セリ
九連城ハ鴨綠江ノ右岸ニアリ清國東邊ハ要鎮トセル城市ナリ征清之役、我第三師團ハ江ヲ渡リ虎山ニ於テ大ニ清兵ヲ破ルヤ敗兵凡一萬五千清將宋慶及劉盛休之ヲ率井退テ此城ヲ扼守セリ十月廿六日第一軍ノ之ニ向フヤ清兵ハ夜ニ乘シ城ヲ空フシテ既ニ遁走セリ故ニ直ニ該城ヲ占領シタリ當時(十月二十六日九連城發)野津中將ノ戰況電報ハ左ノ如シ(茲ニ記シテ占領ノ景況ヲ示ス)

十月二十三日佐藤大佐ノ枝隊水口鎮ノ土流ニ於テ鴨綠江ヲ徒涉シテ敵ノ步兵三百人、騎兵六十人ヲ破リ敵背ニ出ツ軍ハ二十四日夜義州城外ニ於テ密ニ鴨綠江ニ架橋シ二十五日拂曉ヨリ第三師團軍橋ヲ渡リ前面虎山ノ右翼ニ據リタル敵ト開戦シ大迫旅團長右翼ノ峻

嶺ニ登リ敵ノ側面ヲ瞰射スルニ及ヒテ敵遂ニ支フル能ハス九連城ノ方向ニ逃走セリ此時敵ノ四縱隊旗ヲ列ヘテ猛進シ來リ我正面ノ山上ニ登リテ猛烈ノ射擊ヲナシ我兵大ニ力戦ス此時立見少將旅團ヲ率キ虎山ノ左翼ヲ迂回シテ敵ノ背後ニ出テ劇シク其側背ヲ衝キ大ニ敵ヲ破リテ窮追シ鞍河ヲ徒涉シテ敵ノ幕營ヲ奪ヒ大砲十門ヲ分捕シ此夜ハ第三師團ト共ニ九連城背後ノ要地ニ露營セリ又當第五師團ノ前衛モ此附近ニ露營シ余ハ軍司令官(當時第一軍司令官ハ山縣大將ナリシ)ト共ニ虎山ノ東北ニ宿營セリ此夜敵ハ我陣地ニ向テ頻リニ大砲ヲ亂射セリ二十六日午前四時半ヨリ第三師團ト共ニ三道ヨリ敵ノ側背ニ迫レリ然ルニ敵ハ拂曉マテニ遁走セシヲ以テ我軍直ニ九連城ヲ占領シ第五師團ハ鳳凰城及大東溝ニ向ヒ追撃兵ヲ出セリ敵ハ九連城附近ニ堅固ノ防禦工事ヲナセリ敵ハ大連灣、旅

順口、小站、蘆臺等ノ精兵ニシテ宋慶之ヲ統督シ凡ソ十七八營ナリト
我軍死傷將校七名下士以下七十名敵ノ死者三百餘人分捕大砲三十
四門大小銃砲彈藥及天幕無數ナリ云々

鳳凰城ハ九連城ノ西北十六里ニアリ遼陽ヨリ奉天ニ達スル街道ニ當
リ清國東北方ハ要塞ナルヲ以テ常ニ若干ノ兵ヲ置キテ守備セシメタ
リ城ノ周圍一里二十一町、高サ約三十尺ノ高壁ヲ繞ラシ外ニ濠ヲ設ケ
タリ我軍ノ進ムヤ清兵城ヲ燒キテ遁走セリ故ニ十月二十九日立見枝
隊、占領シテ之ニ據レリ

安東縣ハ鴨綠江ノ右岸、九連城ノ南ニアル舊清國最東ハ縣治ヲ置ク所
ナリ此市ハ光緒二年(明治八年)新ニ設ケシ市街ニシテ人口凡四千アリ市ノ
南端ハ直ニ鴨綠江ニ臨ミ稅關ノ設ケアリ材木輸出ノ稅ヲ課シタリ材
木ハ鴨綠江ヲ下リ來ルモノナリ第一軍ノ部隊ノ本縣ヲ占領スルヤ附

近ノ占領地土民ヲ安撫スルカ爲メ十一月四日ニハ此地ニ民政廳ヲ置
キ訴訟ヲ聽キ窮乏ヲ恤ム等順民ヲ懷ケタルヲ以テ土人悅服シ爭フテ
我治下ニ來リ我用ヲ爲シ治績既ニ見ルヘキモノアリシ

岫巖州(或ハ秀巖ニ作ル)鳳凰城ヲ距ル約二十里ノ内地ニアル一市街ナ
リ人口凡一萬ト稱スレトモ卑賤ノ民ノミニテ市街ハ十五六町ニ亘ル
一條街ニ數條ノ横街アリ茲ニ大賈店舗アリ產物ハ市中ヨリ大理石ノ
細工ヲ產シ附近ニ鐵鑛アリト云フ十一月十八日大迫少將ノ率キル第
五旅團(名古屋)ハ之ヲ占領シタリ
大孤山港ハ半島ノ南岸大洋河口ニアリ黃海岸ニ於ケル第一繁盛ノ市
場ニメ木材ノ輸送最モ盛ナリ其他大豆、人參、鹿角、熊膽等ノ產アリ人家
凡三千戸一旦兵火ニ罹リタレトモ福島中佐(正)ノ撫諭ニヨリテ土民我
治下ニ服セリ

草河口ハ鳳凰城ノ北、遼陽街道ニ當ル一集落ナリ十一月廿五日立見枝隊ハ優勢ナル吉林兵ト激戦シ遂ニ該地附近ヲ占領セリ

折木城ハ秀巖ノ西南十五里ニアリ十二月十二日ニハ桂中將ノ率ユル第三師團ノ爲メニ占領セラレタリ

海城ハ折木城ノ西北ニアル奉天省樞要ハ城市ナリ城壁ハ高サ三十四尺ニシテ四方ヲ圍マレ周圍一里餘本城ハ小ナレトモ堅固ナルコトハ滿州第一ト稱セラレ且ツ西ハ牛莊ヨリ錦州ニ通シ北ハ遼陽ヨリ奉天府ニ通スベキ要衝ニ當ルヲ以テ清軍ノ根據ト恃ミシ所ナリ十二月十三日第三師團ハ之ヲ陥落シテ占據セリ爾來清兵ハ必ス之ヲ恢復セントシ前後三回マテ來襲セシモ終ニ復スルコト能ハサリシ海城附近ハ土地稍々肥沃市街ニハ阿片製造所アリ

鉢瓦寨ハ海城ノ南ニアル一集落ナリ此地ノ著名ナルハ十二月十九日

大迫旅團及大島少將(久直)ノ第六旅團(澤澤)ハ大雪烈風中優勢ノ清兵ト大激戦ヲ開キ奮闘終ニ之ヲ占領セルニアリ

牛莊城ハ牛莊口即チ營口ト別遼河下流ノ左岸近クニ在リ河口ナル營口ヨリ湖ルコト數里城ハ角形ニシテ高壁ヲ以テ繞ラシ周圍凡一里アリ明治二十八年三月四日第一軍則チ第三第五ノ兩師團ハ兵ヲ合シテ攻撃セリ清兵壁ニ據リ扼守シテ敢テ敗走セス是ニ於テ我軍壁ニ迫リ遂ニ激烈ナル市街戦ヲ開キ之ヲ陥落セリ

次ニ半島ノ西南部則チ我第二軍ノ進軍占領セシ各地ヲ記スベシ第二軍ハ第一軍ノ始メテ清領ニ進入セシト殆ト同時即チ明治二十七年十一月二十四日遼東半島ノ東岸ナル花園口ニ上陸シタルヲ始メトシ爾來明治二十八年三月九日田庄臺攻撃ニ至ルマテニ西南部數百方里ノ地ヲ占領シタリ

金州ハ遼東半島南部ニ在ル主要ノ城市ナリ城ハ方形ノ高壁ヲ以テ繞ラシ一面ノ長サ約十丁アリ城門四個ヲ設ク清國ハ政廳ヲ爰ニ置キ常ニ兵丁一千ヲ屯駐セシメタリ市ノ人口凡二萬餘市况頗ル繁盛ナリ我二軍ノ花園口ニ上陸スルヤ其十一月六日第一師團ノ一部進ンテ此城ヲ攻撃シ遂ニ其城門ヲ破壊シテ直ニ占領セリ第二軍ハ占領後民政廳ヲ置キ順民ヲ恤ミ道路ヲ修繕スル等大ニ治績ヲ舉ケタリ

金州ノ南ニ大連灣アリ該灣ハ半島ノ要地ナルヲ以テ清國嘗テ堅固ノ海岸砲臺ヲ築キ要害甚タ堅シト稱セラレタリ金州略取ノ翌日即チ十一月七日乃木少將ハ枝隊(第一旅團)(京東)ハ抵抗ヲ受ケズシテ占領セリ爾來灣内ニアル柳樹屯ヲ以テ重要ノ上陸點地ト定メラレタリ

旅順口ハ遼東ハ西南端ニ在リ山東半島ハ威海衛ト共ニ渤海ノ口ヲ扼シ北京ノ兩門扉ト稱セラレタリ故ニ清國ハ嘗テ巨億ハ資ヲ投シテ軍ヲ占領セリ則チ十一月二十一日未明ヨリ攻撃ヲ始メ同日午後ニハ山地中將ノ率ユル第一師團ノ大部ハ松樹山其第三聯隊_(麻布)ハ椅子山長谷川少將ハ混成旅團_(熊本小倉)ハ二龍山ノ各砲臺ヲ陥落シ其午後四時ニハ第一師團ハ更ニ進ンテ最モ堅固ノ名アリシ黃金山ハ砲臺ヲ陥レ翌十二日旅順口全體ノ占領ヲアレリ當時第二軍司令官大山大將ノ戰報ハ左ノ如シ

第二軍ハ廿一日ノ拂曉ヨリ旅順ノ後方陸正面ノ諸堡壘ヲ攻撃セリ即第一師團ハ右翼ニ混成第十二旅團ハ左翼ニ展開シ攻城砲ヲ其中間ニ位置セリ敵ハ終末ニ至ルマテ頗ル頑硬ノ抵抗ヲ爲セシモ第一師團ハ遂ニ午前八時半『騎寶營』練兵場ノ西方ニアル堡壘團ヲ占領シ

午後二時旅順ニ侵入シ四時、黃金山ノ砲臺ヲ占領セリ混成旅團ハ午前十一時半、八里莊、東南ノ堡壘團ヲ占領セリ二十二日ノ午前ニ於テ軍ハ全ク自餘ノ海岸諸砲臺ヲ占領セリ我死傷ハ將校以下二百餘名敵ノ死傷捕虜未タ詳ナラス戰利品殊ニ大口徑ノ砲及歩砲彈藥等甚タ多シ敵ノ兵力ハ二萬ヲ下ラザルガ如シ

二十二日午前八時 旅順口ニ於テ 大山大將

復州ハ金州ノ西北二十五里ニアリ城ハ例ニヨリ長方形ノ高壁ヲ以テ圍マレ市街ハ丁字形ノ大街アリ人口二萬五千ト稱ス旅順占領後、第二軍ノ先鋒隱岐聯隊(第一聯隊東京)ハ十二月五日ヲ以テ占領セリ

蓋平城ハ復州ノ北約三十里ニアル遼河以東ノ一都會ナリ城ハ高壁ヲ以テ繞ラシ城内市街數條アリ人口三萬餘ト稱ス蓋州河口ノ一阜頭ナリ、征清之役清ノ歩兵六千砲兵二百之ヲ扼守ス明治二十八年一月十日

乃木、混成旅團ノ手ニヨリテ占領セラレタリ

營口ハ三月六日第一師團ニヨリテ占領セラル抑々營口ハ滿州唯一ハ貿易港ニシテ遼河ヲ溯ル六里ハ右岸ニアリ牛莊港ト稱スルモノ是ナリ市街兩區ニ分レ下流ニアルヲ西營口ト云ヒ支那街ナリ上流ヲ東營口ト稱シ外國居留地タリ戸數總テ三千、人口六萬ト稱スレトモ恐ラクハ四萬ヲ出デザルベシト云フ此港ハ要港タリト雖ニ寒氣強キヲ以テ冬季ハ一般ノ貿易モ殆ト中止ノ姿トナル在留外人ハ總テ百名許ニシテ英人ヲ主ナリトス明治二十六年度ノ貿易額ハ一千七百六十六萬兩ナリ(輸出品ハ前示セリ)輸入品ノ重モナルハ防寒用ハ織物トス從來我國ヨリ輸入セシハ磁器、燐寸、昆布、石炭、綿子ル等ヲ主ナリトス

第二軍ハ營口占領ヲ以テ遼河以東ノ地ハ全ク日本新占領地ニ歸シ第一軍ノ海城附近ヲ占領セルモノト連絡ヲ通シ三月九日ニハ第一第二

ノ兩軍ハ連合シテ齊シク遼河ヲ渡リテ田。庄。臺ヲ占領シタリ是ノ時ニ
當リテ清國媾和ノ哀求アリテ休戦トナリ續テ平和條約ノ締盟トナリ
遼河以東ノ半島ハ全ク我日本新領地ニ歸シタリ

(明治二十八年九月五日誌)

新日本地誌終

版權登録

明治二十八年十一月三十日印刷
明治二十八年十二月三日發行

(定價金五錢)

著作者 矢 津 昌 要 人

東京市小石川區西江戸川町九番地

發行者 小 柳 津 昌 要 人

東京市日本橋區通三丁目十四番地

印刷者 齋 藤 章 達

東京市日本橋區兜町二番地

發行所 九善株式會社書店


東京市日本橋區通三丁目十四番地

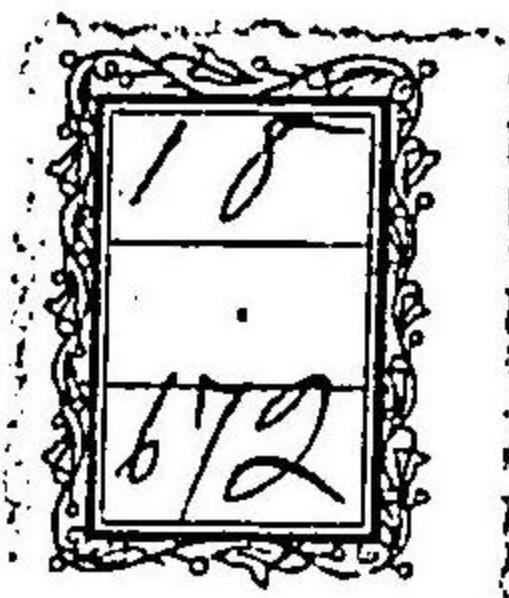
全 出 張 所

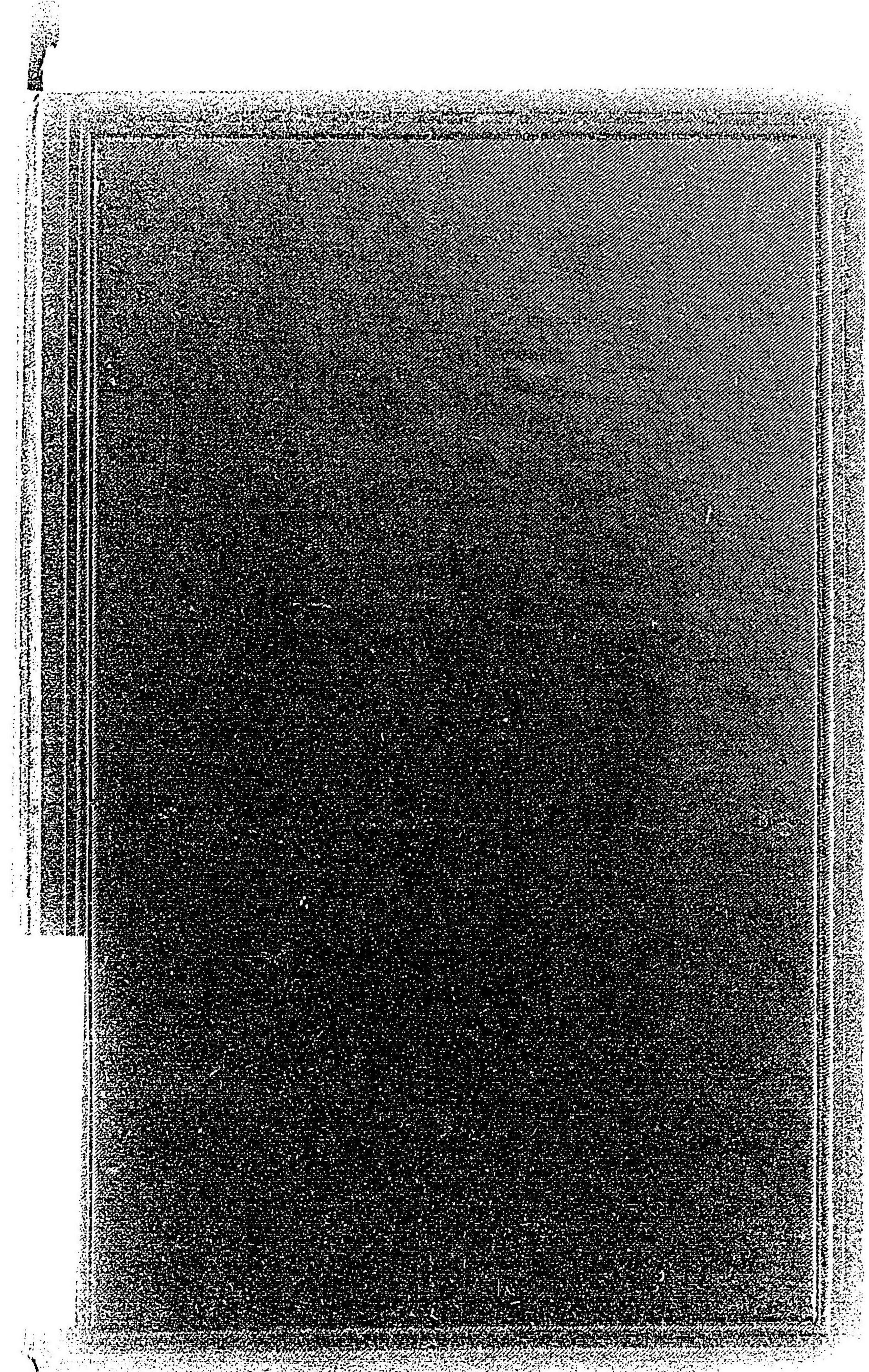
大阪市東區北久寶寺町四丁目

印刷所

東京製紙分社







18

672

(M)

022569-000-7

18-672

新日本地誌

矢津 昌永／著

M28

ADB-0267

